

兵どもが夢の跡 ―東根小屋町遺跡の発掘調査―

高橋 学*1・五十嵐一治*2

秋田県教育委員会は、秋田市街地の中心部中通地区に整備される秋田県教育・福祉複合施設の中核として、「秋田明德館高等学校」を平成17年4月に開設する。この施設は、近世秋田藩主の居城、久保田城の外堀（大手門の堀）から50mほど南に位置し、参勤交代路（東根小屋町通）に面することから、その敷地内には高禄の上級武士邸宅跡の存在が予想された。そのため秋田県教育委員会では、平成14・15年に2期にわたる発掘調査を実施し、旧秋田保健所等の建物基礎（地中梁）内外に遺存した、1,000基を超える遺構群を検出した。出土遺物は中国産輸入磁器や桃山茶陶、および国内生産が開始されたばかりの初期伊万里をはじめ、日本海運を通じてもたらされたさまざまな陶磁器類のほか、多くの木製品類が多量に出土した¹⁾。

東根小屋町遺跡における主要な遺構は母屋や附属屋を構成した柱穴である。また井戸跡や便所跡、およびゴミ捨て穴などの生活に密着した遺構も多く検出した。一部の遺物出土状況からは、これらの遺構内外において様々な祭祀行為が執り行われていたことを垣間見ることができ、その形態は意外にも古代以来の形式を保っていたことが確認できた。近世遺跡における祭祀の様相を示す類例としては、久保田城外堀に取り付く中土橋のたもとで、鳥形と灯火具が一括出土した事例がある²⁾。これらは武家社会において様々な場面で執り行われたであろう祭祀行為が、古代祭祀の形態を（形式的ではあろうが）損なうことなく伝世されてきたものであったことを示している。

前記したように、調査では900基を超える柱穴を始め、1,000基以上の遺構群を検出した。井戸跡では、様々な祭祀行為を確認し、S E 122井戸跡（図1）には、使用時に繰り返しヒョウタンが容れられ（写真5・6）、古代以来の湧水点祭祀がそのまま再現されている。またヒョウタンと同時に、木彫仏像（写真4）の一部が容れられる段階もあり、より良質の水を得ようとした祭祀行為の一端がうかがわれる。この地区は水質が悪く、S E 122井戸跡においても5段・2.4mの深さまでの井戸の掘り下げを確認した。この井戸跡では礫の投げ込みを含む閉塞時の祭祀行為も確認し、井戸開削から使用時、閉塞にいたるまで（作業安全上から井戸最下部は確認できなかった）、様々な場面において祭祀が執り行われたと考えられる。隣接するS E 152井戸跡では、閉塞の際に息抜きのために節を抜いた竹が差し込まれていた（報告書図版20参照）。掘立柱建物跡を構成する柱穴は、建物重量を支えきれずに、軟弱地盤に柱アタリ部分が沈下した状況が全域で確認された。それらの多くは礎板をあてて復旧されていたが、2重3重に礎板を入れたり、根石と組み合わせた事例も多く確認した。その礎板の直下、柱穴底面に柱材がめり込んだ面に、陶器皿が埋置された事例（写真7）を複数確認した。元来が湿地帯を埋め立てて造成した宅地であるため、合口（写真8）も含め、宅地造成そのものが幾度にも渡り繰り返され、その際に一時的な建物解体と再建築を繰り返した際に執り行われた祭祀のひとつであろう。溝跡でもS D 2214溝跡に、周囲を打ち欠いた播鉢が納置されていた事例（写真9）を確認した。宅地内でも最も低い位置にある溝跡で、宅地割り境界の悪水路に排水する宅地内排水の要ともなる部分のため、祭祀対象となった部分であろうか。

*1 秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所学芸主事兼調査班長 *2 秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事

このように個々の祭祀行為の内容は、古代以来の水辺祭祀の系譜を引くものと理解できる。しかしその内容としては、それぞれの場を「神聖視」することよりも、「維持」する意図をはっきりと読み取ることができ、祭祀行為の形式は伝世されてはいるものの、実利にかなった目的意識を確認できる様相を呈している。これは近世武家社会における祭祀行為の在り方としてではなく、古代律令祭祀が中世以降、目的を具現化させるために汎日常的な「まじない」として形骸化していく過程を示しているが、それら祭祀行為を介在する道具は極めて保守的な形態を保ち続けていたことを示しているのではないだろうか。

- 1) 秋田県教育委員会『東根小屋町遺跡』秋田県文化財調査報告書第387集 2005（平成17）年
- 2) 秋田県埋蔵文化財センター『久保田城跡発掘調査資料』2004（平成16）年

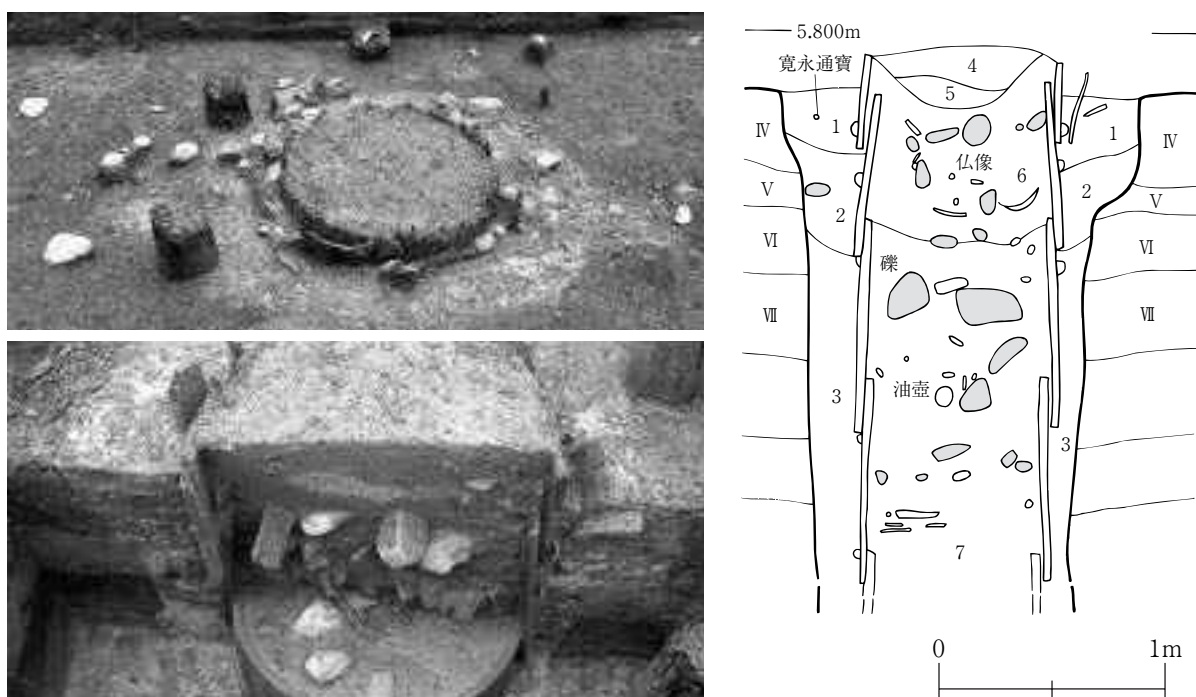


図1 S E 122井戸跡土層図

写真1

S E 122井戸跡確認状況

写真2

同上 半截状況

礫、木製品・部材が投げ込まれている
下段の井戸側（桶）は、3段目上端部

写真3

同上 半截状況

下段の井戸側（桶）は、5段目上端部

写真 4

S E 122 井戸跡出土遺物

6 層中位

(2 段目の井戸側内)

左上：仏像（高さ 11.6 cm、
第 94 図 9）

右下：磁器（染付灰落とし
か）



写真 5

同上 7 層中

(4 段目の井戸側内上部)

上：ヒョウタン

左：油壺(肥前産、c18後半
～c19初、第68図1)



写真 6

同上 7 層中

(5 段目の井戸側内上部)

ヒョウタンが石で割られ
た状態で出土





写真 7

U地区3・SKP 1114
柱抜き取り後に皿を埋納
陶器溝縁皿（砂目、灯明皿
に転用、全面に漆塗付、
1600～1630年、第13図1）



写真 8

陶器出土状況・K地区
皿を合口状にして埋置
（唐津産、
胎土目 1590～1610年）
上：第15図7（口径11.1cm）
下：第15図4（口径11.8cm）



写真 9

SHA地区3・SD2214溝跡
右：周囲を打ち欠いた播鉢
（内部に円礫、堺産か、
c16末～c17初、第18図1）
中央上：漆器碗
左：下駄（足駄）